

## 第五章 浮舟の物語 浮舟、出家後の物語

[第一段 少将の尼、浮舟の出家に気も動転]

かかるほど(こうして姫君と僧都が受戒式を上げている時に)、少将の尼は(少将尼は)、兄の阿闍梨の来たるに会ひて(一行の中に兄の修行僧が来ていたので、会って)、下にみたり(自室に居ました)。\*「しもにみたり」は注に<自分の部屋にいた。>とある。受戒が姫の部屋で行われて、その様子に少将尼が気付かなかった、ということは、姫の部屋は寝殿の西母屋で、少将尼の局は東の対屋の廂か渡り廊下沿いの小部屋だったのだろうか。

左衛門は、この私の知りたる人にあひしらふとて(左衛門はこの一行の中の個人的な知り合いの僧に相手になっていて)、かかる所にとりては(このように偉僧に多くの修行僧が付き従って下山する場合には)、皆とりどりに(尼庵の下働きの者にも、皆それぞれに)、心寄せの人びとめづらしうて出で来たるに(懇意の僧たちが珍しく山から出て来ていたので)、\*はかなきことしける(無駄話をしたり)、\*見入れなどしけるほどに(身支度を構ってやったりしていたので)、こもき一人して(コモキ一人だけが)、「かかることなむ(こういうことになっています)」と少将の尼に告げたりければ(と姫の受戒を少将尼に知らせたので)、惑ひて来て見るに(少将尼は慌てて姫の部屋の様子を見に来ると)、わが御上の衣(わがおおんうへのきぬ、僧都はご自身の法衣や)、袈裟などを、ことさらばかりとて着せたまつりて(袈裟などを、この急場の有り合せに姫にお着せ申し上げて)、\*「はかなきこと」は<「量無き言」=無駄話>と取って置く。\*「見入れ」はよく分からない。古語辞典には<中を見ること。>とあるが、此処の語用では意味不明だ。で、「見入れ」が「見入る」の連用名詞だとすると、「見入る」には<面倒を見る。目をかける。>(大辞泉)という語用があるようなので、この「見入れ」は<面倒見をする→身支度を構ってやる>と解して置く。

「親の御方拝みたまつりたまへ(親の御方角に拝み申しなさいませ)」

と言ふに(と言うが)、いづ方とも知らぬほどなむ(姫は方角が分からず)、え忍びあへたまはで(母上への申し訳なさに堪えきれず)、泣きたまひにける(泣いてしまいなされたのです)。

「あな、あさましや(何と浅ましい)。など、かく奥なきわざはせさせたまふ(どうして、こんな早まった真似をなさいませ)。上、帰りおはしては(尼上がお帰りになったら)、いかなることをのたまはせむ(何と仰ることか)」

と言へど(と少将尼は言うが)、かばかりにしそめつるを(こうして受戒が始まっているのを)、言ひ乱るものしと思ひて(止め立てするのも迷惑に思って)、僧都諫めたまへば(僧都が叱りなされたので)、寄りてもえ妨げず(少将尼は近付いて止めることは出来ません)。

「流転三界中(るてんさんがいちゅう)」 \*注に<僧都の詞。『集成』は「前(四恩を拝する儀)の礼拝に続いて、師僧がまず唱え、出家者に唱えさせる偈」と注す。逸経「清信士度人経」の偈。「諸経要集」「法苑珠林」に引かれる。>とある。「偈(げ)」は<仏語。經典中で、詩句の形式をとり、教理や仏・菩薩(ぼさつ)をほめたたえた言葉。4字、5字または7字をもって1句とし、4句から成るものが多い。頌。>と大辞泉にある。よく分からないが、この場面からすると、法事儀式で唱える決まり文句と思えば良さそうだ。で、出典参照には<「流転三界中(るてんさんがいちゅう) 恩愛不能断(おんないふのうだん) 棄恩入無為(きおんにゅうむゐ) 真実報恩者(しんじつほうおんしゃ)」(法苑珠林)>とあって、この字句を音読みで唱えたらしいので、この場面では意味以前に、その音読みの声の流れたことこそが見物のようだ。が、まあ序でなので、語意も少し見て置く。詩文の筋は、「流転三界中」は<「三界(さんがい)」を流転している中では>、「恩愛不能断」は<「恩愛」を断つことは出来ない>、「棄恩入無為」は<「恩」を捨てて「無為」の境地に入れば>、「真実報恩者」は<本当に「恩」に報いる者になれる>で、その「無為」の境地に至るべく修行するために出家する、ということから、剃髪に先だつて是を唱えるらしい。だから、是を唱える前に、親の方角に一礼させた、という場面の意味は少し分かった。が、仏教関係のウェブサイトも多いので、少し拾い読みして経文の語意の理解に努めてみても、どうもややこしい。「三界」は仏語で<欲界・色界・無色界の称。>と古語辞典にある。是らを<物理・情理・論理>と言い換えてみると、確かに其らは世界を読み解く手掛かりになりそうな気はするが、そう言うだけで世界が表現できている、とは私には思えない。子供の頃聞いた落語の枕に「女三界に家無し」を引く話があり、それは女は親に仕え、亭主に仕え、舅に仕えて苦勞する、みたいな説明で、その時はそれで分かったような気がしていたが、それは全世界の中にある事象の一例という意味だったらしい。「恩愛」は<生きていることへの感謝>を<親の愛への恩に矮小化した考え>のこと、らしい。昔、小林旭の「北帰行」に「恩愛我を去りぬ」という歌詞があつて、意味不明だったが、今でも意味不明だ。「無為」は<特に何かを意識・意図しない境地>みたいな説明もあるが、そういう概念を企画している時点で何らかの意図はありそうで、むしろ<習熟>とか<パターン認識>とかいう概念の方が正確らしく見えるが、どうなんだろう。また、「無為」は<趣き>の事のようにもあるが、それは無意識というよりは、未整理の気付き、みたいなものだろう。ただ、未整理状態が貴重だという言い方には何処か惹かれるものはある。多分、未整理状態は全知全能化状態で、実際には有限存在の個体は時間制限があるので、何らかの結論を得るべく一定の打算を以て情報整理をせざるを得ず、多くの場合、有り触れた処置をしてしまう、みたいなことだ。ともあれ、親の愛に報いるというような世俗の義理を離れた立場からこそ真実の恩が実践できる、みたいな言い方ではあるらしく、如何にも出家式に相応しい文句ではありそうだ。

など言ふにも(などの偈文を僧都が唱える時も)、「\*断ち果ててしものを(私は入水を思い立った時に既に親の恩には背いていたものを)」と思ひ出づるも(と常陸女には思い出されるのも)、さすがに情けないのでした)。 \*「たちはてしものを」は注に<浮舟の心中の思い。既に入水まで決意したことをさす。>とある。従うが、問題は常陸女が「棄恩」していたことを<だから自分は既に悟っている>と思ったのか<だというのに悟っていない>と思ったのか、という点で、その解釈次第で下の「さすが」の意味が違って来る。と言つても、悟っていないから、まだ俗世をさまよっている、ということは客観事実なので、だから今、出家式をしてもらっている、と読む他は無い。

御髪も削ぎわづらひて(姫の御髪がとても多いので、阿闍梨たちは上手く切り揃えかねて)、

「のどやかに(後はゆっくりと)、尼君たちして、直させたまへ(尼君たちに直してもらってください)」

と言ふ(と言います)。額は僧都ぞ削ぎたまふ(額髪は僧都が切りなさいます)。

「かかる御容貌\*やつしたまひて(このような御器量を尼削ぎなさって)、悔いたまふな(後悔なさいますなよ)」 \*「やつす」は<粗末な形をする>だが、具体的に<出家して剃髪すること>とも古語辞典にある。

など(と言って)、\*尊きことども説き聞かせたまふ(出家が意義深いこととする有難い説法を姫に聞かせなさいます)。「とみにせさすべくもあらず(急いで出家なさることはない)、皆言ひ知らせたまへることを(尼君たちが皆言ひ聞かせなさいたことを)、うれしくもしつるかな(嬉しいことにやり遂げた)」と(と常陸女は)、これのみぞ仏は生けるしるしありてとおぼえたまひける(この道だけが仏は生きる意味があるものとお導き下さったと感じなさいたのでした)。 \*「たふときことども」は注に<三帰の功徳を説き十善戒を授ける。>とある。分からないので曖昧に言って置く。

## [第二段 浮舟、手習に心を託す]

皆人びと出で静まりぬ(僧都一行が京へ出発したので尼庵は静まりました)。夜の風の音に、この人びとは(夜風の音に少将尼は)、

「心細き御住まひも(せっかく中将殿が好意をお寄せになって、心細いお暮らしも)、しばしのことぞ、今いとめでたくなりたまひなむ(後しばらくで、直ぐに目出度く結婚なさるだろう)、と頼みきこえつる御身を(と期待申していたあなた様なのに)、かくしなさせたまひて(このように剃髪なさってしまって)、残り多かる御世の末を(生い先長い御将来を)、いかにせさせたまはむとするぞ(どう生きていらっしゃるお心算なのですか)。老い衰へたる人だに(老いて力弱くなった人でさえ)、今は限りと思ひ果てられて(出家すると人生が終わったように思えて)、いと悲しきわざにはべる(とても寂しいものです)」

と言ひ知らすれど(と言ひ聞かせるが)、「なほ(むしろ)、ただ今は(この方が)、心やすくうれし(気軽で嬉しいのです)。世に経べきものとは(世間並の暮らしをするべきだと)、思ひかけずなりぬるこそは(考えなくて良くなったのは)、いとめでたきことなれ(とても喜ばしいことです)」と、胸のあきたる心地ぞしたまひける(と姫は晴々した気がしなさいます)。

翌朝は(つとめては)、さすがに人の許さぬことなれば(そうは言っても誰にも相談せずにしたことなので)、変はりたらむさま見えむもいと恥づかしく(変わった姿を見せるのもとても恥づかしく)、髪の裾の、にはかに\*おぼとれたるやうに(髪先が起きがけのように乱れて)、しどけなくさへ削がれたるを(だらしないほどに切られているのを)、「むつかしきことども言はで(嫌味を言わずに)、つくろはむ人もがな(切り揃えてくれる人がいないものか)」と、

何事につけても、つつましくて(と、何より先に気が引けて)、\*暗うしなしておはす(薮戸も閉めて、部屋を暗くしていらっしゃいます)。 \*「おぼとる」は<乱れ広がる。>と大辞泉にある。現代語へのつながりは分からないので手応えの無い語だが、「おぼろ(ぼんやりしたさま)」に通じているような気もする。 \*「くらうしなしておはす」は注に<あたりをわざと暗くして。>とある。

思ふことを人に\*言ひ続けむ言の葉は(姫は考えていることを人に説明する言葉は)、もとよりだにはかばかしからぬ身を(もともと上手に言えない性分なので)、まいてなつかしうことわるべき人さへなければ(まして親しく相談する相手もいないので)、ただ硯に向かひて、思ひあまる折には、手習をのみ(ただ硯に向かひて、言いたい事がある時は、習字事で)、たけきこととは、書きつけたまふ(思いの丈を書き付けなさいます)。 \*「言ひ続く」は注に<他人に詳しく話す。>とある。言い続ける→詳しく話す→説明する、だろうか。

「なきものに身をも人をも思ひつつ、捨ててし世をぞさらに捨てつる (和歌 53-16)

「本当に 捨てたいものは 母でした (意識 53-16)

\*「身(み)」は常陸女自身。「人(ひと)」は入水を思い立った当時は、一義には三の宮で、薫大将は二義だったようだが、出家直前には、一にも二にも薫大将になったようだ。言ってみれば、入水失敗からのこの半年あまりは、この事に気付く為の反省期間だったのかもしれない。しかし、常陸女が女冥利を味わったのは三の宮との舟遊びだったことは、消しようも、消す必要も無い輝かしい事実だ。その事のためだけに生まれて来た、という極論さえ成立するほどだ。で、常陸女が言う「世」は、どうやら<母上>のことらしい。となると、やはり罪作りだったのは母君のこの娘を余りに特別扱いした育て方にあった、と思わざるを得ない。いや、当時でなくても、多分今でも、王家血筋は諦めるにはあまりにも惜しく、八宮と契ったことが母君自身の宝物であってみれば、その拘りこそが生き甲斐なのは無理もない。でも、どうせ認知されない娘にしてみれば、他の兄弟姉妹と仲良く育てられた方がどんなに楽しく幸せだったことか。ということを、作者が読者に示そうとしただけの歌に見える。

今は、かくて限りつるぞかし(是で本当にお別れです)」

と書いても(と理屈では分かった心算で書いてみても)、なほ、みづからいとあはれと見たまふ(やはり、自分を悲しい人生だと思えます)。

「限りぞと思ひなりにし世の中を、返す返すも背きぬるかな」(和歌 53-17)

「高望み 落ちた梯子の 板ばさみ」(意識 53-17)

\*「限り」は<終わり=死>と<極み=宮家筋>との掛詞、なのだろう。

[第三段 中将からの和歌に返歌す]

同じ筋のことを(姫がこうして、同じような内容の歌を)、とかく書きすさびみたまへるに(あれこれと書き流していらっしやると)、中将の御文あり(中将からのお手紙が届きました)。もの騒がしう呆れたる心地しあへるほどにて(少将尼と左衛門は姫の出家に物事の整理が着かず気落ちし合っていた時だったので)、「かかること(こういう次第です)」など言ひてけり(と文遣いに言っただけで帰りました)。いとあへなしと思ひて(中将はとても落胆して)、

「かかる心の深くありける人なりければ(そのように出家の意志が固くあった人なので)、はかなきいらへをもしそめじと(少しの返事もせずによいと)、思ひ離るるなりけり(突き放していた訳だ)。さてもあへなきわざかな(それにしてもがっかりだ)。いとをかしく見えし髪のを(以前垣間見た時の、とても美しく見えた髪を)、たしかに見せよと(ちゃんと見せてくれと)、\*一夜も語らひしかば(先日の夜にも相談したら)、さるべからむ折に(その内に)、と言ひしものを(と少将尼は言っていたものを)」 \*「ひとよもかたらひし」は少将尼が相手らしい。

と、いと口惜しうて(と、とても残念で)、立ち返り(直ぐに再度)、

「聞こえむ方なきは(何とも言葉も無いが)、

岸遠く漕ぎ離るらむ海人舟に、乗り遅れじと急がるるかな」(和歌 53-18)

この海人は 舟を漕いでも 坊主かな」(和歌 53-18)

\*注にく中将から浮舟への贈歌。「岸遠く」は此岸から彼岸へ、の意。「海人」「尼」の懸詞、「乗り」に「法」、「急ぐ」に「磯」を響かす。「岸」「漕ぐ」「海人舟」「乗り」縁語。>とある。「尼」と「海人」を掛けるのは殆ど決まり事だが、上手く纏まっている。が、自分も出家したい、というのは本心ではないから愛想だ。が、出家した人にも愛想尽かさず挨拶するのは貴族の余裕か、それとも泡でも掴みたい自分可愛さか。

例ならず取りて見たまふ(姫は尼僧の立場になって言い寄られる心配がなくなったからか、いつもと違って中将の手紙を手にとって御覧になります)。ものあはれなる折に(心の中での母との別れに感傷的になっていた時に)、今はと思ふもあはれなるものから(中将との縁も是までと思うと寂しくなって)、\*いかが思さるらむ(今さらに風流に)、いとはかなきものの端に(ごく普通の習字用紙の端に)、 \*「いかがおぼさるらむ」は<どうのお心算なのだろうか>という言い方のようだが、上で心境は「あはれなる」と言っているので、是は<何を今さら(風流ぶって)>という軽口なのだろう。

「心こそ憂き世の岸を離るれど、行方も知らぬ海人の浮木を」(和歌 53-19)

「この海人は 行方知れずに 舟出して」(意訳 53-19)

\*注にく浮舟の返歌。「岸」「離る」「海人」の語句を用いて返す。「海人」「尼」の懸詞。>とある。「浮木(うきぎ・うきぎ)」は<いかだ。舟。>のことらしい。また、「盲亀浮木(もうきのふぼく)」という語の説明が<〔百

年に一度海面に浮上する目の見えない亀がたまたまそこに漂っていた流木の穴に頭を入れたという「涅槃経」にある話から] 仏の教えに出会うのが容易でないことのとえ。また、非常にまれなことのたとえ。浮き木の亀。>と大辞泉にある。だから、私に悟りが得られるかどうかは分かりませんが、という、恐らくは中将にはどうしても好いようなことを、常陸尼自身の趣きで答えたものなのだろう。いや、もうこの二人には、歌の中身や濃さは殆ど意味が無い。遣り取りがあった、という記念があれば十分なだろう。

と、例の(と、いつもする)、手習にしたまへるを(風情の無い練習字書きにしなされたのを)、\*包みてたてまつる(少将尼はそのまま包んで返歌として中将に差し出し申します)。\*「つつみたてまつる」の主語は敬語が無いので少将尼らしい。

「書き写してだにこそ(あなたが清書して差し上げないと)」

とのたまへど(と姫は仰ったが)、

「なかなか書きそこなひはべりなむ(いえいえ書き損じますので)」

とてやりつ(と言って少将尼は文遣いに渡します)。めづらしきにも(中将は姫の自筆の返歌を愛しく思うにも)、言ふ方なく悲しうなむおぼえける(出家なさってしまった今さらは、何を言っても甲斐無く悲しく思われます)。

物詣での人帰りたまひて(初瀬詣りをした妹尼君はお帰りになって)、思ひ騒ぎたまふこと、限りなし(姫の出家を残念に思い大変に驚きなさいます)。

「かかる身にては(私の尼僧の立場では)、勧めきこえむこそは(出家をお勧め申して当然)、と思ひなしはべれど(と思ってはみますが)、残り多かる御身を(将来あるあなたは)、いかで経たまはむとすらむ(修行生活に没して良いのでしょうか)。おのれは、世にはべらむこと(私の寿命は)、今日、明日とも知りがたきに(今日明日とも知れませんので)、いかでうしろやすく見たてまつらむと(何とか安定した暮らしが立つようにして差し上げたいと)、よろづに思ひたまへてこそ(考えまして)、仏にも祈りきこえつれ(中将殿との御縁がありますように、仏様にもお願い申しておりましたものを)」

と、伏しまろびつつ(と泣き崩れて)、いとみじげに思ひたまへるに(とても残念そうにしていらっしやるのを)、まことの親の(実の母親が)、\*やがて骸もなきものと(この尼君のように、私が亡骸も無く消え失せてしまったと)、思ひ惑ひたまひけむほど推し量るるぞ(途方に暮れていらっしやると推量されるのが)、まづいと悲しかりける(何よりもとても悲しくなるのでした)。例の(いつものように)、いらへもせで背きゐたまへるさま(返事もせずに背を向けていらっしやる姫の姿が)、いと若くうつくしげなれば(とても幼げで可愛らしいので、「いともものはかなくぞおはしける御心なれ(何とも頼りなくいらっしやるお考えだこと)」と(と尼君は)、泣く泣く御衣のことなど急ぎたまふ(泣く泣く姫の法衣や数珠を用意なさいます)。\*「やがて」はくそのまま←自分が姿を消したまま>という意味で「からもなし」に掛かる

のだろうか。しかし、此処では尼君の姿に母親の姿を重ねているのだから、その尼君の姿がくそのまま  
>今の母君の姿に見えて<同じように>という言い方で「推し量るる」に掛かる副詞と読んで置く。

鈍色は(にびいろは、法衣のねずみ色の生地仕立ては)手馴れにしことなれば(手慣れて  
いたことなので)、小桂、袈裟などしたり(尼君は小桂や袈裟を作ります)。ある人びとも(尼  
庵の女房たちも)、かかる色を縫ひ着せたてまつるにつけても(こういう法衣を姫にお仕着せ  
申すにつけても)、「いとおぼえず(思いがけず得られた)、うれしき山里の光と(喜ばしい山  
里に差した光と)、明け暮れ見たてまつりつるものを(毎日姫を御世話申して来ましたのに)、  
口惜しきわざかな(残念です)」

と、あたらしがりつつ(と惜しんで)、僧都を恨み誹りけり(僧都を恨んで非難していまし  
た)。

#### [第四段 僧都、女一宮に伺候]

一品の宮の御悩み(第一皇女のご病状は)、げに(まことに)、かの弟子の言ひしもしるく(あ  
の弟子が自慢げに言っていた通りに)、いちじるきことどもありて(僧都の効験がはっきり現  
れて)、おこたせたまひにければ(御回復なさったので)、いよいよと尊きものに言ひの  
のしる(ますます僧都の尊さを世間が讃えます)。名残も恐ろしとて(ぶり返しを用心して)、  
\*御修法延べさせたまへば(中宮が御修法を延長させなさったので)、とみにもえ帰り入らで  
さぶらひたまふに(僧都は直ぐには山に帰れずに六条院に留まりなさいたが)、雨など降  
りてしめやかなる夜(雨が降ってしっとりした夜に)、召して、夜居にさぶらはせたまふ(中  
宮は僧都をお呼び出しになって、夜居を勤めさせなさいます)。 \*「みすほふのべさせたまへば」  
の主語は<母君の明石中宮>なのだろう。

日ごろいたうさぶらひ極じたる人は(何日もの看病で疲れ果てた女房は)、皆休みなどして  
(皆休んでいて)、御前に\*人少なにて(皇女のお部屋に人が少なく)、近く起きたる人少なき  
折に(近くで起きている女房が席を離れた時に)、\*同じ御帳におはしまして(中宮が皇女の寝  
台と一緒にいらっしやって)、 \*「ひとずくな」は<人が少ない状態>だろうに、さらに続いて「ひと  
すくなきをり」と語られる。ということは、「すくなきをり」の「すくなし」は<少ない>という基調状態と  
は別の事柄を言っているのだろう。動詞の「すく」は<少なくなる>でもあるが<空席になる>でもある。「な  
し」は補助動詞「為す(そのようにする)」の連用名詞の形容詞語用と見做せそうなので、「すくなし」は<席  
を離れている>という変化状態と読めそうだ。 \*「おなじみちやうにおはしまして」は注に<中宮が病気の  
女一宮の御帳台と一緒にいる意。>とある。此処まで<中宮>を主語に明示するのを避けるのは、皇后位に対  
する遠慮なのだろうか。むしろ、主語を伏せる事で皇女と皇后と僧都だけがいる場面に、当時の読者は臨場感  
を得るといふ親近感なのだろうか。いずれにしても、こういう書き方は私にはとにかく分かり難い一方で、も  
し是が雲上世界の演出だとしたら、改めて皇位の底の浅さに飽きれる所だ。開かれた社会では、客観的な価値  
を説明出来てこそ敬うに適う。だから、是は親しさだと思って付き合って置く。ところで、「開かれた社会」  
と口を吐いたついでに、開かれた社会を認識して、自分の領する国土の身の丈に合った自給を図る閉じた計画  
で足場を固めることと、根拠もなく‘閉じた社会’を夢想することとは、全く別のことだ、と改めて覚書して

置く。というのも、この GPS 環境下で、未だに自国の歴史を客観検証しようとしなない国々の中に、この国も類していることに暗然とせざるを得ないからだ。勿論、どこの国だって御都合主義で手前勝手に生きているし、それは物理だろうが、現に‘開かれた環境’下でそれなりの豊かな暮らしが成立していることを見れば、他者に敬意を表して友好関係を続ける以外に、現状の物性維持および発展の可能性を探ることは有り得ない。日本の天皇位も早く歴史資料を開示して、客観的な価値体系の研究成果を得て、資格要件構成を整備ないと、その暗黒性の弊害であっけなく自滅するかもしれない。もし、天皇制に寄り掛かって尊大に振る舞いたいだけの人が多いなら、それは私には気味悪い精神状態に見えて、とてもそんな妄言に付き合いたくないので、むしろ制度は無い方が素直に万物の精霊を感じられそうで、多分それは教条ではなく、同じ地上生命体としての共感かと思うので、是は天皇制に限らず他の宗教についてもだが、そんな教条慣習は早く無くなってほしいくらいだ。が、制度は有機生命体のように自然消滅しないので厄介だ。変更には相当な労力が要されそうで気が重い。ただ、どういう変更をするにも、その前提認識として歴史の客観検証は必要だし、急務だ。そして、それは必ずしも完全無欠な結論を得る必要はないし、そんなことを目論んだら宗教だろうし、今さらはそんなことは不可能だろうし、むしろ不断に見直す姿勢が確保されれば、一定の成果を基に制度構築は出来るだろうし、するべきだ。少し先走って予想すれば、皇位を人気投票で決めるのが無意味だとは皆が思う所だろうし、土地を耕す農耕で国土開発してきた歴史に資して数世代続いた名家や寺社を皇位継承の有資格者にすることに同意出来ない人は少ないような気がするが、どうだろう。尤も、宗教の価値体系を最新の物理天文学で組織機構概念から外さなければならぬので、厳密な論理整理の正統性は何時終わるとも無く絶えず見直し続けねばならないのだろうが、産業構造と国土開発の歴史的な検証で一先ずの形を合意形成することは、一定期間内に出来るはずだし、最大限急ぐべきだ。アメリカ合衆国政府がマイクロソフト社の秘密主義で利権を守ろうとするのとは違って、元々が多数の人の共有概念である言語の一体性が公開されるのは、その上で場合によってはそれらの運用を公権力が管理するにしても、概念自体が共有資産であることは原型なので、原状復帰に過ぎないが、土地を耕すのはヒトが物理的に命を削った成果なので、その価値は各個体が今を生きる尊さに直結するしていて、むしろ歴史を具に詳らかにすることは各個体の物理的な使命感を示して、その存在意義を自覚するのに資するだろう。その意味では、マイクロソフト社も技術開発に貢献した評価は正当に受けるべきだ。しかし、その秘密主義は軍事力を背景にした国家権力による合法化で、他国への順守を強要して守られている。その国際的な利権構造は、言語に依拠しているので魔力はあるが、瓦解すれば跡形も無い。無論、歴史に縛られる必要はなく、交易を盛んにして、より広範な分業化によって生産効率を上げ、より豊かな生活を実現することは有効だし、様々な可能性に挑戦し、競争し、冒険し、未来を切り開く多様性の追求は生存本能でもあるが、今を大事にしない者に明日の来ようはずもない。

「昔より頼ませたまふなかにも(以前からこの宮の息災は御僧を頼りにしていらっしゃいますが)、このたびなむ(この度の靈験では)、いよいよ(いよいよ以て)、後の世もかくこそはと(姫宮の来世まで安泰だと)、頼もしきことまさりぬる(頼もしきが増しました)」

などのたまはず(と中宮は仰います)。

「\*世の中に久しうはべるまじきさまに(もう私の寿命も長くないと)、仏なども教へたまへることどもはべるうちに(仏が教え下さるお告げもございまして)、今年(ことし)、来年(らいねん)、過ぐしがたきやうになむはべれば(越せるかどうか分かりませんので)、仏を紛れ



なく念じつとめはべらむとて(仏を一心に念じて善行を積もうと)、深く籠もりはべるを(深く山に籠もっていましたが)、かかる仰せ言にて(中宮様のお召しにて)、まかり出ではべりにし(出て参りました) \*「よのなかに～」は注に<以下「出ではべりにし」まで、僧都の詞。『完訳』は「仏のお告げで命終の時期を予知する話は、高僧伝などに多い。朝廷の召しにも容易に出仕しなかった言い訳でもある」と注す。>とある。

など啓したまふ(と僧都は啓しなさいます)。

[第五段 僧都、女一宮に宇治の出来事を語る]

御もののけの執念きことを(中宮が姫宮に取り憑いた物の怪の執念深さや)、さまざまに名のるが(僧都の破魔業に追い出されて、いろいろと名乗った魔物どもが)\*恐ろしきことなどのたまふついでに(恐ろしかったことをお話しになるのに関連して)、 \*「おそろしきことなどのたまふ」は注に<主語は明石中宮。『集成』は「今度の経験から、自然に浮舟のことに話が及ぶ体。『完訳』は「物の怪について話す中宮の言葉に、僧都は浮舟に憑いた物の怪を想起。浮舟紹介の契機」と注す。>とある。

「いとあやしう(拙僧もとても不思議な)、\*希有のことをなむ見たまへし(珍しい出来事を経験致しました)。この三月に(このさんぐわちに)、年老いてはべる母の(年老いております母が)、願ありて初瀬に詣ではべりし(願い事があって初瀬にお詣りしまして)、帰さの中宿りに(帰りの最中の旅寝で)、宇治の院と言ひはべる所にまかり宿りしを(宇治の院という所に泊まり申しましたが)、かくのごと(あのよう)、人住まで年経ぬる大きな所は(人が住まずに何年も経った大きな屋敷には)、よからぬものかならず通ひ住みて(魔物が必ず通い住んで)、重き\*病者のため悪しきことども(重病の者にいろいろと悪いことをするもの)、と思ひたまへしも(と存じておりました)、しるく(通りのことがありました)」 \*「希有」は「けう」の読みで、注に<「希有」漢語。男性用語。>とある。今では、割と普通に使う語だ。 \*「病者」は「びやうじゃ」と読みがある。注には<「病者」漢語。男性用語。>とある。この語は現在は殆ど聞かない。

とて(と僧都は)、かの見つけたりしことどもを語りきこえたまふ(常陸女を見つけ出した話を中宮にお話し申しなさいます)。

「げに、いとめづらかなることかな(本当に珍しい話ですね)」

とて(と中宮は)、近くさぶらふ人びと皆寝入りたるを(近くに控える女房たちが皆寝入っていたのを)、恐ろしく思われて(恐ろしい話に心細くなりなさい)、おどろかさせたまふ(起こしなさいます)。大将の語らひたまふ\*宰相の君しも(薫大将が近くしていらっしゃる姫宮付き女房の小宰相君が折しも)、このことを聞きけり(この話を聞いていたのです)。 \*「さいしゃうのきみしも」は注に<小宰相の君。「蜻蛉」巻に初出。女一宮づきの女房。『完訳』は「しも」と強調される点に注意。薫にこの情報の伝わる可能性が拓けた」と注す。>とある。

おどろかさせたまふ人びとは(中宮がお起こしになった女房たちは)、何とも聞かず(僧都の話の特に何とも思いません)。僧都、懼ぢさせたまへる御けしきを(僧都は怖がっていらっしやる中宮の御様子を)、「心もなきこと啓してけり(興味本位で、病臥に配慮の足り無い話をお聞かせ申してしまった)」と思ひて(とあって)、詳しくもそのほどのことをば言ひさしつ(詳しくはその時の貴女の気味悪いようすなどは言い控えました)。

「その\*女人(その女人は)、このたびまかり出ではべりつるたよりに(このたび山を下ります際に)、小野にはべりつる尼どもあひ訪ひはべらむとて(小野に居ります母尼や妹尼を見舞おうと)、まかり寄りたりしに(立ち寄りましたところ)、泣く泣く、\*出家の志し深きよし、ねむごろに語らひはべりしかば、\*頭下ろしはべりにき(泣く泣く、出家の志しが深い意向を、熱心に訴えましたので、授戒して来ました)。 \*「女人」は「にょにん」と読みがあり、注に<「女人」漢語。男性用語。浮舟についていう。>とある。 \*「出家」は「しゅっけ」と読みがある。当たり前のようだが、本文で「出家」の語が使われるのは珍しい。世を捨てる、とか、世に背く、とか、山に入る、とか、本意を遂げる、とか、いろいろ言うが、「出家」とはおよそ言わない。 \*「かしらおろす」は<髪を下ろす=剃髪する>。此処では、僧都の詞なので<授戒を授けた>という言い方なのだろう。

なにがしが妹(私の妹は)、\*故衛門督の妻にはべりし尼なむ(故衛門督の妻でございました尼で)、亡せにし女子の代りにと(死んだ娘の代わりにと)、思ひ喜びはべりて(思っ、この女人を得たことを喜びまして)、\*随分に労りかしづきはべりけるを(とても熱心に看病し世話してましたので)、かくなりたれば(出家させた私を)、\*恨みはべるなり(恨んでいるようです)。げにぞ(女人は確かに)、容貌はいとうるはしくけうらにて(顔立ちはたいへん整って美しく)、行ひやつれむもいとほしげになむはべりし(尼僧姿に身をやつすのも惜しいほどではございました)。何人にかはべりけむ(どういう人なのでしょうかねえ)」 \*「こゑものかみのめ」という紹介は皇后がおよその人物像を掴めそうな言い方なのか、実際に面識があるという事情を踏まえたものなのか、いずれにしても、普通の女には言わなそうな言い方だ。 \*「随分に」は「ずいぶん」に」と読みがあり、注に<「随分」漢語。男性用語。>とある。今の日常語だ。今ではずいぶんと漢語表現が浸透してきた、ということらしい。 \*「うらみはべるなり」は注に<自分拙僧を。「なり」伝聞推定の助動詞。>とある。僧都はずっと六条院にいるので、小野からの手紙か従者からの知らせがあったのだろう。

と、\*ものよく言ふ僧都にて(と、おしゃべりな僧都なので)、語り続け申したまへば(その女の話の続けて申しなさると)、 \*「ものよくいふ」は<口が軽い>に近い語感だろうか。ただ、是も出家の利益なのかも知れない。僧都も常陸女が難しい事情を抱えていそうな事は承知していた。女の居場所が外へ漏れることで、どういう事態が起こるのか予想出来ない。だから多分、出家前なら迂闊にこの女の話は他所では披露出来なかったはずだ。しかし出家した以上は、女の身元は山が引き受けた形になるので、僧都自身の責任で女の事情を調べることが出来るようになった、とも言えそうだ。

「いかで、さる所に(どうして、その宇治院という所に)、よき人をしも\*取りもて行きけむ(魔物は良家の子女という人を連れて行ったのでしょうか)。さりとも(でも)、今は知られ

ぬらむ(今はその人の素性は分かっているのですか)」 \*「とりもていきけむ」の主語はく物の怪  
>なのだろう。

など、この宰相の君ぞ問ふ(と、宰相君が訊きます)。

「知らず(分かりません)。さもや(しかし、もしかすると)、語らひたまふらむ(妹尼には  
打ち明けなさっているかもしれません)。まことにやむごとなき人ならば(ただ、本当に身分  
ある高家の姫なら、失踪や捜索が噂に立ち)、何か、隠れもはべらじをや(どうして素性が分  
からないでいられましょうか)。田舎人の娘も(しかし、仮に京の高家の姫でなしに、宇治辺  
りの豪族の姫でも)、さるさましたるこそははべらめ(優れた器量の人はいるものです)。\*  
龍の中より、仏生まれたまはずはこそはべらめ(竜の中から仏がお生まれにならないことは  
ない、と経文にもありますから)。ただ人にては(それくらい、普通の人にしては)、いと\*  
罪軽きさまの人になむはべりける(とても美しい人なのでございます)」 \*「りゅうのなかより  
ほとけうまれたまはずは」は注に<反語表現。挿入句。『法華経』「提婆達多品」にみえる龍女成仏の話。>と  
ある。下に<あらず>が省かれている、ということなのだろう。「法華経(ほけきやう)」は大辞林に<代表的  
な大乘仏教経典。漢訳6種(3種が現存)のうち、二八品より成る鳩摩羅什(くまらじゆう)訳の「妙法蓮華  
経」八巻が最も広く流布。三乗が一乗に帰すること、釈迦が永遠の仏であることなどを説く。天台宗・日蓮宗  
の所依の経典。ほっけきやう。>とある。ほとんど分からないが、比叡山天台宗が典拠とする経文ではあるら  
しい。「提婆達多品(だいばだつたぼん)」は大辞泉に<法華経の第十二品。提婆達多と龍女の成仏を通して、  
悪人などの成仏を説く。>とある。「提婆達多品」の現代語訳や要約や解説などのウェブページは意外に多く  
あって少し雑観したが、「龍女成仏の話」とは、どうやら法華経文の尊さを言う喩え話のようで、8歳の龍女  
が文殊菩薩が海中で唱える経文を聞いて得心し、その証拠に直ちに成仏して極楽浄土に飛んで行った、みたい  
な筋らしい。まるで分からないが、この場に即して文意を取れば、上の「さるさましたる」の理由付けとして  
<龍から仏がお生まれにならないことはない→どこにでも(器量の)優れた人はいらっしゃる>だろうか。 \*  
「つみかろし」は<前世での罪が軽い→醜くなく転生した→器量良く生まれた>という言い方、なのだろう。

など聞こえたまふ(と僧都はお答えなさいます)。

そのころ(中宮は三月頃という僧都の話に、その当時)、かのわたり消え失せにけむ人を  
\*思し出づ(宇治で失踪したという薫殿と三の宮で三角関係になっていた女の話の思い出  
なさいました)。 \*「おぼしいづ」は注に<主語は明石中宮。>とある。また、文意説明として<中宮は  
浮舟が行方不明になったという話を聞き知っている。「蜻蛉」巻にある。>ともある。蜻蛉巻五章七段で中宮  
は、宇治の女が薫大将と匂宮との三角関係になって失踪したこと、を上臈女房の大納言の君から聞かされてい  
た。

この\*御前なる人も(この姫宮付き女房の宰相君も)、\*姉の君の伝へに(実家の姉から伝え  
聞いた話)、あやしくて亡せたる人とは聞きおきたれば(変な形で亡くなった人がいると聞  
いていたので)、「それにやあらむ(その人ではないか)」とは思ひけれど(とは思ったが)、定  
めなきことなり(確かではないことなのです)。 \*「おまへなるひと」は注に<「御前」は女一宮を  
さし、「人」は小宰相君。>とある。 \*「あねのきみのつたへ」は中宮に知らせた大納言君の「姉」かとも思

ったが、蜻蛉卷五章七段には「かしこにはべりける下童の(宇治山荘に仕えていた下僕童が)、ただこのころ(つい最近)、宰相が里に出でまうできて(小宰相君の実家に出て参って)、たしかなるやうにこそ言ひはべりけれ(確かな話として言っていた、とのことです)」と大納言君は中宮に言っていて、やはり情報源は<宰相君の里(姉)>だったらしい。が、となると、大納言君はその情報を誰から聞いたのだろう。小宰相君は軽々しい女ではないと語られていたが、その「姉の君」が大納言君と近くて、彼女から漏れたのかもしれない。となると、此処の「御前なる人」も大納言君の可能性もありそうな気がするが、一応は宰相君と見て置く。

僧都も(また、僧都も)、

「かかる人(この人は)、世にあるものとも知られじと(生きていることを外へ知られまいと)、よくもあらぬ敵だちたる人もあるやうにおもむけて(不都合な争い事になるような人もいるように怖がって)、隠し忍びはべるを(隠れて籠もり暮らしているのも、あまり口外すべきではないのですが)、事のさまのあやしければ(事実として変わった話なので)、啓しはべるなり(お話し申しました)」

と、なま隠すけしきなれば(と、この場では此処までの話にして、後は話さない様子だったので)、\*人にも語らず(小宰相君も何も言いません)。\*「ひと」は<僧都>なのだろう。この文で伏せられている言葉は<この場>かと思われる。即ち、以下の文は、僧都が席を外した後の場面になる、かと思う。左様に下文に明示補語する。

宮は(僧都が席を外してから、中宮は)、

「それにもこそあれ(僧都の御話の女は、あの宇治の人ではないだろうか)。大将に聞かせばや(大将に話してみようか)」

と、この人にそのたまはすれど(と、小宰相君に仰ったが)、\*いづ方にも隠すべきことを(その女本人が誰にも隠そうとしていることを)、定めてさならむとも知らずながら(それが、はっきり宇治の女とも分からないままに)、\*恥づかしげなる人に(気軽に話せる相手でもない薫大将に)、\*うち出でのたまはせむもつつましく思して(世間話のように話し掛けなさるのも気が引けなさって)、やみにけり(それきりになってしまいました)。\*「いづかたにもかくすべき」の主語は<常陸女>なのだろう。\*「はづかしげなるひと」は注に<薫。>とある。気の張る相手、みたいな言い方だろうか。\*「うちいづ」は<フツと口にする=気楽に話す>。

[第六段 僧都、山荘に立ち寄り山へ帰る]

姫宮おこたり果てさせたまひて(姫宮がすっかり回復なさったので)、僧都も登りぬ(僧都も帰山しました)。かしこに寄りたまへれば(小野尼庵にお寄りなさると)、いみじう恨みて(尼君は非常に恨んで)、

「なかなか(若い身空では却って)、かかる御ありさまにて(このように出家しても)、罪も得ぬべきことを(間違いを起こして罪を深くしかねないのに)、のたまひもあはせずなりにけることをなむ(私にご相談も下さらずにお決めになったのは)、いとあやしき(考えられません)」

などのたまへど(と仰るが)、かひもなし(今さらどうにもなりません)。

「今は(今後は)、ただ御行ひをしたまへ(ひたすら精進なされ)。老いたる、若き、定めなき世なり(老いも若きも、何れ定めなき世なり)。はかなきものに思しとりたるも(この世をはかないものと悟りなさるのも)、\*ことわりなる御身をや(それなりの事情があつての事なのでしょう)」 \*「ことわりなるおおんみをや」は注にく『集成』は「意識もなく生死の境をさまよつたことをいう」。『完訳』は「浮舟の物の怪に取り憑かれる運命を思い、出家を当然とする」と注す。>とある。

とのたまふにも(と僧都がおっしゃるのにも)、いと恥づかしうなむおぼえける(常陸女は晴れがましい反面で初々しさが照れくさく気恥づかしさを覚えます)。

「御法服新しくしたまへ(おおんほふぶくあたらしくしたまへ、是で法衣を新調なさい)」

とて(と僧都は言つて)、綾(あや、綾織生地)、羅(うすもの、紗織り地)、絹(きぬ、平織地)などいふもの(などの布施物を)、たてまつりおきたまふ(差し上げて置いて行きなさいます)。

「なにがしがはべらむ限りは(私が生きている限りは)、仕うまつりなむ(御世話申します)。なにか思しわづらふべき(心配いりません)。常の世に生ひ出でて(世俗に生まれ育ち)、世間の榮華に願ひまつはるる限りなむ(世間並の繁榮を願い拘る内は)、\*所狭く捨てがたく(しがらみに捕われた狭い考えを捨てきれず)、我も人も思すべかめることなめる(自分の事も他人の事も本性を見抜けないものなのでしょう)。 \*「ところせくすてがたく」は注にく身の自由もきかずこの世を捨てがたい。出離しがたい。>とある。が、この「捨て難し」は「世」を目的語とした独立分節ではなく、「思すべかめる」を修辭する構文と私は読んで置く。

かかる林の中に行ひ勤めたまはむ身は(この小野の林の中で修行なさるあなたの生活は)、何事かは恨めしくも恥づかしくも思すべき(何ら不満も引け目も負うべきものではありません)。\*このあらむ命は、葉の薄きがごとし(どうせ人の命は、誰でも木の葉一枚の薄さですから)」 \*「このあらむいのちは～」は注にく『源氏積』は「顔色は花の如く命は葉の如し、命葉の如くに薄きを將に奈如にせむ」(白氏文集、陵園妾)を指摘。>とある。漢詩は縁遠いので素通りしたい所だが、下の「松門に暁到りて月徘徊す」という文も「陵園妾」を引いているらしいので、この漢詩は少し見て置かないと全体の文意が取れそうもない。で、ウェブ検索したが、「陵園妾」はあまりヒットしない。辛うじて、「千人万首」サイトの「資料編」の「和歌に影響を与えた漢詩文」ページの「白居易」の項の「白氏文集卷四」に「陵園妾」の漢文と訓読文と通釈が掲載されていたので参照させて貰った。で、この詩の概要は<讒言により御陵の宮殿に幽閉された宮女の悲歎を叙す>とある。つまり、陰口で墓守に追い遣られた側女の悲哀、と

言った所らしい。引用箇所は冒頭の「陵園妾、顔色如花命如葉、命如葉薄將奈何」で<墓守女は美形だが、運命は木の葉のように頼りなく、木の葉のような薄命も救いようが無い>と絶望的だ。しかし、此処での引用の仕方は、常陸女を<美人薄命>と言っているのではなく、「このあらむ命」を<この世にある命＝誰の寿命も>という意味で語用し、「顔色如花」のあなたでなくても<薄命なのだから>と常陸女を、というより、常陸女の出家を慰めているのだろう。漢詩は以下、墓守女の悲哀を連綿と綴る語句が続くようだが、音韻は陰鬱ではない。例えば冒頭は、 陵園妾(リョウエンショウ)顔色如花(ガンショクジョカ)命如葉(ミョウジョヨウ)命如葉(ミョウジョヨウ)薄將奈何(ハクショウナカ)、となっていて、以下は七言対句が続くが、リズムは4・3の<チャンチャンチャーチャ・チャンチャンチャン>という繰り返して好い調子だ。語意で見れば、悲しみが積もるのかもしれないが、結び前にまた「三千人、三千人」と三拍子を重ねてあって、とつとつと一人に語りかける語調ではなく、多数を煽っているように聞こえる。この漢詩は「新楽府(しんがふ)」という形式で詠まれているらしく、その形式の特徴かもしれないが、その形式を選択した時点で詩作意図は決まっていたのだから、少なくとも内向する歌ではなく、外へ訴えている歌ではあるのだろう。

と言ひ知らせて(と僧都は尼姫に説明して)、

「松門に暁到りて月徘徊す(せうもんにあかつきいたりてつきはいくわいす、修行は続くが辛抱なされよ)」 \*注に<僧都の詞。『源氏積』は『白氏文集』「陵園妾」を指摘、前句の続き。>とある。この引用箇所は<月夜にも風流とは無縁に夜を明かす>という幽閉生活を言ったものらしい。この場面での引用語用は<出家は幽閉生活のようなもので、修行生活は単調だが、無情を悟って心静かに暮らせ>という励まし、だろうか。ちょっと分かり難いが、一応そう取って置く。また、この対句は「松門到暁月徘徊、柏城尽日風蕭瑟。」となっていて、下句が「はくじゃうひねもすかぜはせうしつたり、風は屋敷を囲むカシワの木を一日中揺すって寂しい音を立てる」とあることが、次の文の下敷きになっているようだ。

と、法師なれど(と僧侶にしては)、いとよしよししく(とても風流な言い回しを)恥づかしげなるさまにてのたまふことどもを(責任感ある態度で仰るお言葉を)、「思ふやうにも言ひ聞かせたまふかな(ご立派なお話しぶりだ)」と聞きあたり(と尼姫は聞き入っていました)。

[第七段 中将、小野山荘に来訪]

今日は(今日は、先に引いた白居易の「陵園妾」の詩文にある通りのように)、\*ひねもすに吹く風の音もいと心細きに(一日中吹く風の音もとても心細いので)、\*おはしたる人も(この墓守女の所に訪ねていらっしやった僧都も)、 \*「ひねもすにふくかぜのおともいところぼそきに」は注に<『河海抄』は「栢城尽日風蕭瑟たり」(白氏文集、陵園妾)を指摘。>とある。 \*「おはしたるひと」は注に<僧都。>とある。何故此処で、僧都を改めて「おはしたる人」などと言うのか。是も「陵園妾」を踏んだ洒落語用かと思う。即ち、「松門栢城幽閉深(しょうもんはくじょうゆうへいふかく、松門と栢城に深く幽閉され)、聞蟬聽燕感光陰(せみをききつばめをききてくわういんにかんず、蟬や燕の声を聞いて月日が立つのを知り)。」である墓守女の所に<尋ねて来た人>という言い方で、下の「かかる日にぞ音は泣かるなる」が「眼看菊蕊重陽涙、手把梨花寒食心。」に呼応していることの前フリにしているのだろう。

「あはれ、山伏は(感じ入って山伏は)、\*かかる日にぞ(こんな日には)、音は泣かるなるかし(声を上げて泣けてしまいます)」 \*「かかるひにぞねはなかるなる」は「陵園妾」の「眼看菊蕊重陽涙(きくずいをめにみてちやうやうとなみだし、菊花を看着重陽の節句の頃と知り懐かしく涙し)、手把梨花寒食心(りかをてにとりてかんしょくとこころす、梨花を手折って春を待つ)。」を踏んでいるのだろうが、私はこの詩句に幽閉の侘しさは感じられず、虚飾から抜け出た安らぎを得たようにさえ聞こえて、是は大陸と島国との感性の違いなのかと不思議な気もするが、作者が此処で僧都にこの詩文を引かせていることからすれば、白居易がもともと仏教観ないし同種の世界観を以てこの詩文を作為していた、ということの訓示かもしれない。また、重陽の節句については六条院の場面に於いても全く触られていないので、この日が九月九日だったとは思えないが、近い時候ではありそうだ。

と言ふを聞きて(と言うのを聞いて)、「我も今は山伏ぞかし(私も今は山伏なのだ)。ことわりに止まらぬ涙なりけり(通りで涙が止まらないはずだ)」と思ひつつ(と尼姫は思いながら)、端の方に立ち出でて見れば(縁側近くに出て立って外を見ると)、遥かなる軒端より(遠くの軒に掛かって見える坂上に)、狩衣姿色々に立ち混じりて見ゆ(僧とは違う狩衣姿の男たちがいろいろと立ち混じって見えます)。山へ登る人なりとても(比叡山に登る人だとしても)、\*こなたの道には(この小野からの道は)、通ふ人もいとたまさかなり(使う人も稀なのでした)。黒谷とかいふ方よりありく法師の跡のみ(黒谷とかいう方面から歩いて来る法師の姿だけが)、まれまれは見ゆるを(ごく稀に見えるくらいなのに)、例の姿見つけたるは(世俗の人の姿を見つけたのは)、あいなくめづらしきに(意外で珍しかったが)、この恨みわびし中将なりけり(姫の出家を嘆いていた中将なのでした)。 \*「こなたのみち」は注にく『完訳』は「小野を通して比叡山に登る道。険しい長谷出坂あたりか。途中で黒谷(西塔の北方)への道が分れる」と注す。>とある。

かひなきことも言はむとてもものしたりけるを(中将は今さら言っても仕方の無い未練を尼姫に言おうとして遣って来たのだが)、紅葉のいとおもしろく(この小野は紅葉が実に見事で)、他の紅に染めましたる色々なれば(他所の紅葉以上に情趣深い色づきだったので)、入り来るよりぞものあはれなりける(尼庵に入って来るなり感傷的になったのでした)。「ここに(こういう情趣深い所に)、いと心地よげなる人を見つけたらば(いやに気分がさっぱりしているような人がいるのを見知ったら)、あやしくぞおぼゆべき(興ざめかもしれない)」など思ひて(と申して中将は、いきなり愚痴を言うのもためらわれて)、

「暇ありて(暇が出来て)、つれづれなる心地しはべるに(気が向いたので)、紅葉もいかにと思ひたまへてなむ(此方の紅葉はどんなものかと思ひまして、参じました)。なほ、\*立ち返りて旅寝もしつべき\*木の下にこそ(やはり、故君を思い出して此方に旅寝もしたいような見事さですね)」 \*「たちかへる」は<折り返す。すぐ帰る。>でもあるが、此処では<昔に立ち戻る>という語用なのだろう。 \*「木の下」は「このもと」と読みがある。「このもとにこそ」は<こういう時期なので=こんな時だから>という言い訳の語感はあるのだろう。また、下の歌の贈答の前フリにもなっている、ワザとらしい語用にも聞こえる。

とて、\*見出だしたまへり(と言って、庭を眺めていらっしやいました)。 \*「みいだす」は  
<中から外を見る→庭を見る>。

尼君、例の、涙もろにて(尼君は例によって涙混じりに)、

「木枯らしの吹きにし山の麓には、立ち隠すべき蔭だにぞなき」(和歌 53-20)

「木枯らしに 紅葉のしとね 飛びにけり」(意訳 53-20)

\*注に<妹尼の中将への贈歌。『集成』は「浮舟も出家してしまったので、あなたをお泊めするすべもございません」と注す。>とある。「涙もろ」とある割には、相変わらずさっぱりした詠みっぷりに見える。

とのたまへば(と贈歌なさと)、

「待つ人もあらじと思ふ山里の、梢を見つなほぞ過ぎ憂き」(和歌 53-21)

「山里の 後ろ髪引く 佇まい」(意訳 53-21)

\*注に<中将の返歌。「山」の語句を用いて返す。「あらじ」に「嵐」を響かす。>とある。「過ぎ憂し」は<行き過ぎたくない=素通りし難い>という言い方、らしい。

言ふかひなき人の御ことを(と中将は返歌して、言っても仕方の無い姫への未練を)、なほ  
尽きせずのたまひて(やはり諦められずに仰って)、

「さま変はりたまへらむさまを(姫の尼僧姿を)、いささか見せよ(少しでも見せて呉れ)」

と、少将の尼にのたまふ(と少将尼に仰います)。

「それをだに(せめてそれで)、契りししるしにせよ(合わせると言った約束を果たせ)」

と責めたまへば(と迫りなさるので)、入りて見るに(少将尼は尼姫の部屋に入って、その様子を見てみると)、ことさら人にも見せまほしきさましてぞおはする(この日は特に、誰にでも見せたいほど美しい姿をして座していらっしやいます)。薄き鈍色の綾(薄いニブい色の綾織法衣に)、中に\*萱草など、澄みたる色を着て(内着には萱草の澄んだ色を着て)、いとささやかに(とても小柄で)、様体をかしく(姿勢が美しく)、今めきたる容貌に(はなやかな顔立ちで)、髪は\*五重の扇を広げたるやうに(髪は五重の扇を広げたように)、こちたき末つきなり(量の多い切り揃えでした)。 \*「萱草(くわんぞう)」は<ワスレグサの花の色>とのことで、ウエブの色見本では<くすんだ橙色>。喪中の女子の袴の色、とウィキペディアにあるが、此处では内着らしい。  
\*「五重の扇(いつへのあふぎ)」は注に<桧扇は七、八枚の薄板からなる。それを五組重ねた扇。「花宴」巻に「桜の三重がさね」の桧扇が出てくる。>とある。



こまかにうつくしき\*面様の(尼姫はきめ細やかで照りの好い顔艶で)、化粧をいみじくしたらむやうに、赤く匂ひたり(まるで化粧で色を着けたように頬が赤く輝いていました)。行ひなどをしたまふも(読経をなさる時も)、なほ\*数珠は近き几帳にうち懸けて(まだ初々しく、手に馴染まない数珠は近くの几帳に掛けて置いて)、経に心を入れて読みたまへるさま(経文に意識を集中してお読みになっている姿は)、絵にも描かまほし(絵にも描きたいほど可愛らしい)。 \*「面様(おもてやう)」は<顔立ち>ではなく<顔の肌艶>と読んで置く。 \*「ずずはちかききちやうにうちかけて」は注に<『集成』は「常に手にしているはずの数珠を手離しているのは、まだ初心のさまをいうのであろう」と注す。>とある。

うち見るごとに涙の止めがたき心地するを(少将尼は尼姫をちらちらと見る度に、その健気さに涙が止め難い気になるのを)、「まいて心かけたまはむ男は(まして姫を抱きたいと思っていた男は)、いかに見たてまつりたまはむ(どんなに愛しく思い申しなさることか)」と思ひて(と胸を熱くして)、さるべき折にやありけむ(今が絶好の見頃だと)、障子の掛金のもとに開きたる穴を教へて(襖引戸の鍵穴から覗けると中将に教えて)、紛るべき几帳など押しやりたり(邪魔になりそうな室内の几帳を鍵穴からずらして置きました)。

「いとかくは思はずこそありしか(これほど美しいとは思っていなかった)。\*いみじく思ふさまなりける人を(男女関係を非常に悩んでいるような人だったが)」と(と中将は)、我がしたらむ過ちのやうに(姫の出家を自分の所為のように)、惜しく悔しう悲しければ(惜しく悔しく悲しかったので)、つつみもあへず(気持ちが抑えられず)、もの狂はしきまで(狂おしく嗚咽する)、けはひも聞こえぬべければ(気配が姫に聞こえそうなので)、退きぬ(その場を立ち退きました)。 \*「いみじく思ふさまなりける」は是だけでは<非常に悩んでいたらしい>で、何をどう考えて困っていたのかは分からない。で、その内容の手掛かりになるのが、中将が姫の出家を「我がしたらむ過ちのやうに」考えている、という下の文だ。つまり中将が思う所では、自分が言い寄ったことで姫を追い詰めた、ということのようで、姫の悩みは<男女関係>ということになりそうだ。そういう大枠で言う限りは、中将は必ずしも核心人物ではないが、ほぼ正しい認識と言えそうだ。

#### [第八段 中将、浮舟に和歌を贈って帰る]

「かばかりのさましたる人を失ひて(是ほど美しい人が居なくなって)、尋ねぬ人ありけむや(探さない人が居るだろうか)。また、その人かの人娘なむ(また、どこそこの娘が)、行方も知らず隠れにたる(行方知らずになったとか)、もしはもの怨じして、世を背きにけるなど(もしくは、人生に悩んで出家したなどということは)、おのづから隠れなかるべきを(自然に噂が立つものだが)」など(などと中将は)、あやしう返す返す思ふ(不思議だと何度も考えます)。

「尼なりとも(尼であっても)、かかるさましたらむ人はうたてもおぼえじ(このような美しい人なら側に居て嫌ではない)」など(と中将は尼姫を)、「なかなか見所まさりて心苦しかるべきを(愛人としては却って風変わりで興味がありそうなので)、忍びたるさまに(表沙汰

には出来ないが)、なほ語らひとりてむ(さらに言い寄って自分の女にしたい)」と思へば(と  
思うので)、まめやかに語らふ(尼君に親身に話します)。

「世の常のさまには思し憚ることもありけむを(姫は普通の人の時には、男女の仲を避け  
ようとお思いの事情もあったようだが)、かかるさまになりたまひにたるなむ(このような尼  
姿にお成りになったので)、心やすう聞こえつべくはべる(男女の仲を離れて、私は姫に気軽  
にお話し申せるのでございます)。さやうに教へきこえたまへ(あなたからもそういう理屈を  
姫にお教え申してください)。来し方の忘れがたくて(故君との思い出が忘れられずに、あな  
たとお話しがしたく)、かやうに参り来るに(このように此方へ参っておりますが)、また(こ  
うして新しい話し相手がいらっしゃるなら、また)、今一つ心ざしを添へてこそ(もう一つ此  
方へ伺う理由が増えました)」

などのたまふ(と中将は仰います)。

「いと行く末心細く(先々の暮らし向きが頼りなく)、うしろめたきありさまにはべるに(心  
配される姫なので)、まめやかなるさまに思し忘れず訪はせたまはむ(あなた様が姫を故君と  
思って親身にお忘れなくお見舞い下さるなら)、いとうれしうこそ、思ひたまへおかめ(とて  
も嬉しく存じられます)。はべらざらむ後\*なむ(私が死んだ後は)、あはれに思ひたまへらる  
べき(姫が可哀想に思われますので)」 \*「なむ」は理由を示す係助詞の<~が~なので>という言い  
方で、此处では上文に対する説明なのだろう。

とて(と言って尼君が)、泣きたまふに(泣きなさるが)、「この尼君も\*離れぬ人なるべし(こ  
の尼君も姫の縁戚のようだ)。誰れならむ(が、姫は一体、誰なのだろう)」と心得がたし(と  
中将は見当が付きません)。 \*「離れぬ」は<縁遠くない=縁戚だ>という言い方らしい。

「行く末の御後見は(後々の御世話は)、命も知りがたく頼もしげなき身なれど(寿命も分  
からず頼りない私ですが)、さ聞こえそめはべるなれば(このように申し上げた以上は)、さ  
らに変はりにはべらじ(死ぬまで違えません)。\*尋ねきこえたまふべき人は(姫を探し申しなさ  
っている人は)、まことにものしたまはぬか(本当にいらっしゃらないのですか)。さやうの  
ことのおぼつかなきになむ(其処がはっきりしませんので)、\*憚るべきことにははべらねど  
(それがお世話申し上げることの支障になる訳ではございませんが)、なほ隔てある心地しは  
べるべき(やはり何か隠し立てのある懸念はございます)」 \*「たずねきこえたまふべきひと」は  
注に<浮舟を捜し出す人。『集成』は「浮舟のもとの男。浮舟を尼君の縁類と見ているので、敬語を使う」と  
注す。>とある。 \*「はばかるべきことにははべらねど」は注に<『完訳』は「色恋なしの後援なら、何も  
気がねせずともよいが、の気持」と注す。>とある。が、中将の「気持」としては姫は恋愛対象なので、是は  
気持とは裏腹の<言い方>なのだろう。だから、このことは中将の関心の核心だ。近衛中将は帝に直接面識あ  
るほどの近い縁戚だ。28歳と年齢も明示されていて、参議であるかもしれないほどの高官だ。世の中のほ  
とんどは、意のままにならないことは無いだろう。が、上位者は居る。薫大将や兵部卿宮のように帝に直結す  
る破格の高官たちだ。この尼姫は、それらの特別な人々に類するほどの気品を備えている、と中将は直感した  
のだろう。だから、およそのことには畏れない中将も、いや、むしろ平素は自分が帝の権威を体現して他を畏

れさせている中将だろうが、この姫には畏れを感じた、というところか。ちょっとハマりすぎた絶妙の配役に見えるから、やはりこの話は実相の写しか、それらの貼り合わせなのだろう。

とのたまへば(と中将が仰ると)、

「\*人に知らるべきさまにて(世間に知られながら)、世に経たまはば(暮らして行きなされるなら)、さもや尋ね出づる人もはべらむ(そのように探し出す人も居るかもしれません)。今は(しかし姫は今)、かかる方に(このように出家生活を)、思ひきりつるありさまになむ(決意しておりますので)、心のおもむけも(姫本人の望みも)、\*さのみ見えはべりつるを(一切探して欲しくないように見受けられますが)」 \*「人に知らるべきさまにて」は注に<以下「見えはべりつるを」まで、妹尼君の詞。『完訳』は「もしも浮舟が都の人と接触するように暮しているのなら、の意」と注す。>とある。「世に経たまはば」の未然表現は未来仮想らしい。 \*「さのみ」の「さ」は中将が言った「尋ねきこえたまふべき人は、まことにものしたまはぬ」で、それを姫も「おもむけ」ている、と尼君は中将に話を合わせているのだろう。また、「見えはべりつる」は係助詞「なむ」を受けた構文、かと思う。そして、末尾の「を」は<~ということなのですが、いかがでしょうか>と聞き手に理解を求める呼び掛けの間投詞と取って置く。

など語らひたまふ(と尼君も話しなさいます)。

\*こなたにも\*消息したまへり(中将は帰る前に姫の部屋に近付き、姫にも少将尼から次の贈歌を添えて、お帰りの挨拶をなさいます)。 \*「こなたにも」は注に<浮舟をさす>とある。「こなた」は近称だろうから、中将は尼君の部屋から姫の部屋の方へ戻って、恐らく少将尼を介して帰る前に贈歌した、という場面展開なのだろう。分かり難い文で非常に不満だが、そのように見做さないと文意が取れないので、左様に補語する。 \*「消息(せうそこ)」は<伝言>ではなく<来意または帰意を知らせる挨拶>なのだろう。

「おほかたの世を背きける君なれど、厭ふによせて身こそつらけれ」(和歌 53-22)

「私まで 世間の方に 押し遣るな」(意識 53-22)

\*「いとふによせてみこそ」が工夫所だろうか。「身」は<我が身=詠者>で、「見」は<(君の)考え>。前段が<出家した君だけ>で、後段は<君が世間を嫌うついでに、私も嫌われては辛い>みたいな。「背く→厭ふ」の連想はベタだけど洒落っ気らしい。が、常陸女にしてみれば、中将に其処まで親しげにされる覚えはないんじゃないだろうか。終わってないよ、始まってないから、みたいな。

ねむごろに深く聞こえたまふことなど(中将が親身に深く申しなさる言葉を)、言ひ伝ふ(少将尼は姫に言い伝えます)。

「兄妹と(はらからと)思しなせ(思ってください)。はかなき世の物語なども聞こえて(色恋抜きの、他愛ない世間話などをお話し申して)、慰めむ(お見舞い申します)」

など言ひ続く(と中将は言い続けます)。

「\*心深からむ御物語など(偉い中将様の難しそうなお話しは)、聞き分くべくもあらぬこそ口惜しけれ(分かりそうもないので残念です)」 \*「こころふかし」は<思慮深い>。皮肉か嫌味か、とにかく煙幕を張って遠ざけようとしたようだが、こういう戯れ口調は男心を得てしてを刺激するので、断るなら頑なに固辞すべきだ。

といらへて(と尼姫は応えて)、この\*厭ふにつけたるいらへはしたまはず(中将が「厭ふによせて」と親しみを見せる贈歌には、それこそ厭気して返歌なさいません)。 \*「いとふにつけたるいらへ」は、一つは中将の「厭ふによせて身こそつらけれ」とあった贈歌への<返歌>で、もう一つは如何にも風流めかした中将の歌詠みに<嫌気が差して応えない>だ。

「思ひよらずあさましきこともありし身なれば(心ならず不始末をしでかした私は)、いとまじ(本当に疎ましい)。すべて朽木などのやうにて(何事も無く枯木のように)、人に見捨てられて止みなむ(誰にも忘れられて終わりたい)」ともてなしたまふ(と中将には素っ気なく対応なさいます)。

されば(というわけで)、月ごろたゆみなく結ぼほれ(この数ヶ月間ずっと塞ぎ込んで)、ものをのみ思したりしも(物思いばかりなさっていた姫も)、この本意のことしたまひてより(この出家を遂げなさってからは)、後すこし晴れ晴れしうなりて(後は少し晴れ晴れしい表情になって)、尼君とはかなく戯れもし交はし(尼君と他愛ない冗談もかわし)、碁打ちなどしてぞ(碁打ちなどをして)、明かし暮らしたまふ(明け暮らしなさいます)。

行ひもいとよくして(読経勤めも熱心で)、法華経はさらなり(法華経は言うまでもなく)、異法文なども(ことほふもんなども、別の経文も)、いと多く読みたまふ(とても多くお読みなさいます)。\*雪深く降り積み、人目絶えたるころぞ(しかし、雪深く降り積もって、人の出入りが無くなった真冬の小野尼庵は)、げに思ひやる方なかりける(実に気分の晴らしようがないものなのでした)。 \*「ゆきふかくふりつみ」は注に<小野は雪深い土地。『伊勢物語』第八十三段。>とある。また、出典参照に<「雪降りて人も通はぬ道なれやあととはかもなく思ひ消ゆるむ」(古今集冬-三二九 凡河内躬恒)>と指摘がある。が、「雪深く降り積み、人目絶えたるころ」という字句の引用元が何処かに無ければ、「げに」とは納得出来ない。